第2実験は、成員の構成、課題のタイプに加えて、この時間経過の効果を検討するために企画された。以下に順を追って報告する。

第1実験

目　的

成員のIE得点に基づく等質・異質集団に、構造化された課題（乱数表の集計）と構造化されない課題（創造性検査）とを与えて、集団の成績を比較する。従来の諸研究が示唆するところに従って、等質集団は構造化された課題にすぐれ、相対的に異質集団は構造化されない課題にすぐれているであろう、との仮説を検討する。

方　法

被験者と集団編成：被験者は大学生男性80名、女性48名、計128名で、実験に先立ってRotter（1966）のlocus of control尺度の日本語版（吉田・白樫，1975）によってIE得点を測定されていた。この得点の理論的分布範囲は0点から23点までであるが、本実験の被験者では最低が3点、最高が20点であった。得点は高いほど外的統制型への傾斜が強いことを表している。

これらの被験者から同性の4人集団が32集団（男性集団が20集団、女性集団が12集団）編成された。その際、成員のIE得点に関して等質な集団と相対的に異質な集団が同数ずつ（すなわち、等質な男性の10集団と女性の6集団、異質な男性の10集団と女性の6集団）になるように、かつ両種の集団間で平均得点が可及的に等しくなるように配慮された。最終的に得られた集団編成は表1に示されている通りであった。

表の最下行に見るとおり、IE得点の集団平均の中央値は等質集団、異質集団ともに12.1と等しいが、得点の標準偏差（SD）の中央値は等質集団で1.12と小さいのに対し異質集団では4.36と有意に大きい。

一般的手続き：順序効果を相殺するために、等質集団、異質集団それぞれの半数（各8集団、性構成にも偏りのが生じないように配慮）ずつに、前半構造化された課題（乱数表の集計）を、そして後半に構造化されない課題（創造性検査）を行わせ、残りの半数の集団には順序を逆にして作業を行わせた。

独立変数：①成員の構成（等質集団 対 異質集

表1　等質・異質集団の成員構成（IE得点の分布）

等質集団							異質集団						
Gr. I. D	成員のIE得点				平均	SD	Gr. I. D	成員のIE得点				平均	SD
G01	12	12	12	13	12.3	*0.43*	G17	5	8	16	17	11.5	*5.12*
G02	10	12	13	15	12.5	*1.80*	G18	5	10	14	18	11.8	*4.82*
G03	11	12	13	13	12.3	*0.83*	G19	6	8	16	18	12.0	*5.10*
G04	11	12	12	12	11.8	*0.43*	G20	3	8	15	17	10.8	*5.58*
G05	10	10	11	11	10.5	*0.50*	G21	8	9	14	16	11.8	*3.34*
G06	10	11	12	14	11.8	*1.48*	G22	7	7	13	18	11.3	*4.60*
G07	11	12	13	15	12.8	*1.48*	G23	5	9	13	16	10.8	*4.15*
G08	10	11	12	13	11.5	*1.12*	G24	12	13	15	20	15.0	*3.08*
G09	10	14	15	15	13.5	*2.06*	G25	5	11	15	18	12.3	*4.87*
G10	12	12	13	15	13.0	*1.22*	G26	8	10	15	18	12.8	*3.96*
G11	11	12	12	12	11.8	*0.43*	G27	10	11	14	17	13.0	*2.74*
G12	11	12	13	14	12.5	*1.12*	G28	7	10	15	18	12.5	*4.27*
G13	11	12	13	14	12.5	*1.12*	G29	13	14	17	19	15.8	*2.38*
G14	10	11	13	14	12.0	*1.58*	G30	6	8	11	16	10.3	*3.77*
G15	9	10	13	13	11.3	*1.79*	G31	7	10	16	20	13.3	*5.07*
G16	9	10	11	12	10.5	*1.12*	G32	7	9	15	18	12.3	*4.44*
中央値					12.1	*1.12*						12.1	*4.36*

平均値間に有意差なく、標準偏差(SD)間には$p<.001$水準の有意差があった。ただし、U検定による。